英語授業における視聴覚教材の活用

岐阜県立東濃高等学校　佐藤 純子

1　本校の特徴

本校は、全校生徒２９１名(平成２５年１０月２２日現在の在学者数)の全日制普通科高校である。ただし、外国籍生徒が５８名と全体の２割近くを占める。発表者も、昨年度１年生外国人クラス１６名の担任で、彼らの国籍はフィリピンとブラジルが半分ずつである。今年度は、２年生普通クラスの担任に持ち上がっている。近年岐阜県可児・加茂地区の外国人の数は減少傾向にあるが、昨年度外国籍２３名、今年度１４名と、その生徒数は減っていない。

東濃高校は全日制普通科高校である。ただし、単位制を導入し、生徒が自分に合った科目を選んでいけるというシステムをとっている。部活動もテニス部、野球部、吹奏楽部などが頑張っている。しかし、勉強が苦手な生徒が多数存在する中で、全校で学び直しに取り組み、何より「授業をしっかり受ける、時間を守る」などのスローガンを掲げ、学力の低下に歯止めをかけようとしている。その手法としては、スタンプを使った取り組み姿勢の評価や、授業のユニバーサルデザイン化などに取り組んでおり、生徒にとって、「わかりやすい授業・意欲を高める授業」を目指している。

本論は、視聴覚教材の利用について書かれているが、発表者個人にとって、その取り組みの根拠となる、本校の課題と生徒の学び直しへの取り組みに関する記述が大部分となってしまうことをご容赦願いたい。

また、発表者は英語教授法「寺島メソッド」を活用しており、考案者である元岐阜大学教授で、現在国際教育総合文化研究所所長の寺島隆吉先生に負うところが大きい。また、発表者が寺島先生の著書を読みながら実践し、学校現場に合わせるため、いくらかの改変や、もしかしたらメソッドを間違って解釈している場合もありうることをご承知願いたい。

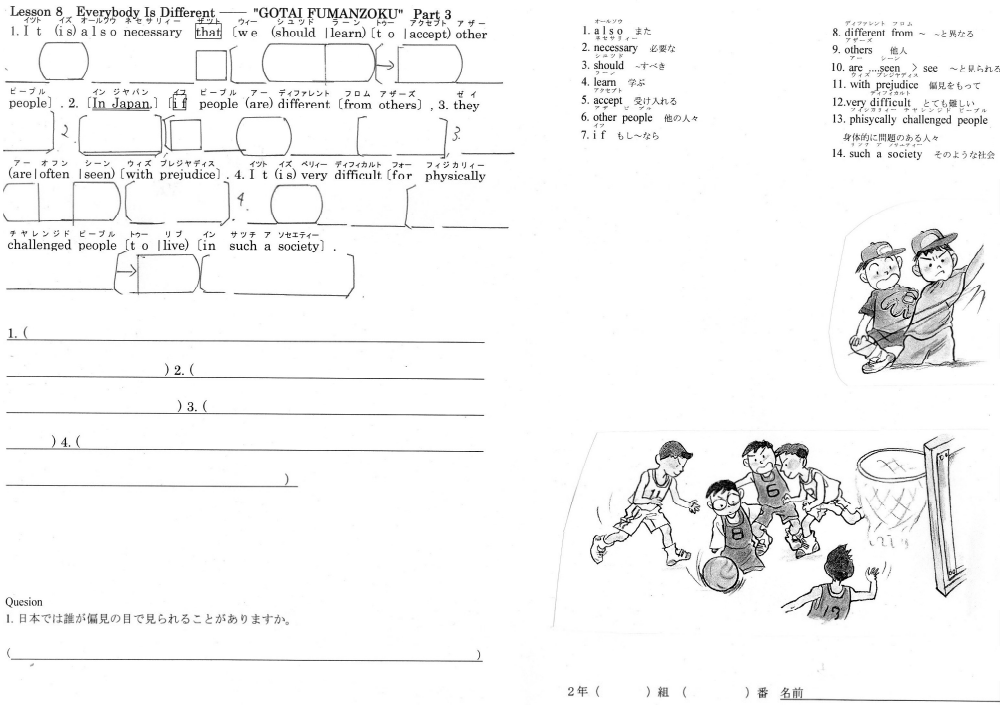
2　生徒にとってわかりやすい授業

本校では、生徒にとって「わかりやすい授業」とするために、年に２回生徒から授業評価アンケートを取ったり、授業のユニバーサルデザイン化に関連し指導言の視覚化に気を配って授業をしている。本時の目標を明示したり、わかりやすい黒板の書き方をするなど、どの教科でも工夫を重ねている。英語科としては、本校が県内で１２校のみの ALT 配置校の１つであるという特徴を生かして、生徒が英語を聞いたり話したりする機会を増やし、英語で基礎的なコミュニケーションができる指導法を研究している。

しかし、外国籍生徒以外では英語を聞いたり、話したりすることに興味を持てる生徒はなかなかいない。さらに、外国籍生徒は日本語を習得するのに必死である。そのため、英語の授業は必然的に視覚に訴えたり、英文を読んで自分で訳を書き入れていったりという作業を通して、知識の定着を図っていくというやり方になってきた。

さらに、中学からのブリッジ教材を取り入れたり、授業プリントを各学年の教科書に合わせて作るなどの工夫をしている。その授業プリント作成に当たっては、以下のような記

号研方式を取り入れている。



このプリントに沿って学習することで、生徒は一対一対応で、英語に日本語を埋めていかなくてはならない。それが全部できると、自然と日本語らしく訳すことができるようになる。この方式は、外国籍の生徒にも有効である。彼らは英語を学びながら日本語も学んでいるが、授業において日本語の文法の解説を加えることはしていない。なぜかというと日本語の文法は外国籍生徒に聞かれて、一介の英語教師が説明できないばかりか、生徒たちも拒否反応を起こしかねないからである。ただ、簡単と感じる外国籍生徒には、もう少しハードルをあげて、ペンタブレット(電子ペン等で記入するタブレット)を使った授業を３年生異文化理解のクラスで行っている。

3　記号研について

まず、ここで記号研について説明しておかなくてはならない。なぜなら、私が本校に配属されてから大部分の時間をこの研究と実践に費やしてきたからだ。今回の発表も、その研究の一部がメディア部会の方々の目にとまったに過ぎないと感じている。

私は、平成１８年(2006)に１４条で内地留学をさせて頂き、岐阜大学大学院で学びました。そこで、『英語記号づけ研究会』の主宰者である寺島先生に教えを受けました。当時、私は授業だけでなく、部活などにも悩んでおり、本当に藁にもすがるような思いで、寺島先生に問い続けました。なぜなら、学校生活の色んなことに絶望して教える気力を失いつつあったからだ。理由は、色々なことがありますが、「文法ばかりを教える授業」や、「ゲームを使った授業」などを全て試したあげく、労多くして実少ない授業を繰り返してきたこともその一因であった。

寺島先生には、こういった授業をして、私が感じていることを残らず言い当てられたし、動詞に○、従位接続詞に□をつける手法を教えていただき、生徒にそれを教えると、偏差値５０もない程の生徒が偏差値７０、８０を取り出したことに、自分自身も驚いてしまっ

た経験があるので、話を聞かざるを得なかった。

本校に転勤が決まって、困難校だということは聞いていたが、いざ生徒たちと向き合ってみると、想像を超えた大変さがあった。以前の進学校で教えてきた「便法」のみでは立ち行かない苦しさがあった。

まず、部活の指導で生徒と衝突した。困難な生徒たちを前に、真面目な生徒が部活をやりたいのにやらせてもらえない不満を私に言ってきました。そこで、寺島先生からはまず、**「陶冶」と「訓育」とは何か**と聞かれました。私は、寺島先生の本は、平成２２年(2010)くらいにはほとんど読んでいましたが、『英語にとって「教師」とは何か』(2002,あすなろ社、資料　私の教育原理 p.49 ~)の中の一番最初に書かれた言葉でした。

でも、私は当時、全くその意味が分かりませんでした。前任校の進学校では、必要ない知識だったからだ。**「陶冶」**はいわゆる教科指導、**「訓育」**は生活指導です。部活は「訓育」の部分に入ります。

私は、*大西忠治を修論のテーマに選んでいたので、それで例示する。大西は文章を「文学作品」と「説明的文章」に分けて、その読み取り方を細かく教えていくのが、**「陶冶」**、逆に、生徒が学校に毎回遅刻するのでどうしたらそれをなくせる「集中力」、「継続力」、「計画力」をつけさせるのかが**「訓育」**です。

部活も、昼休みに生徒が遊びでする草野球に先生が行って指導することがないのと同じように、この「訓育」にあたるわけなので、生徒は、先生がいなくてどうしたらやっていけるのかを考えることも指導の一部であるわけだ。寺島先生には、その時「顧問は来んもん。」と生徒に教える必要があると言われました。私は、それまで、実業高校、進学校含めて、部活に振り回されてきたので、一挙に心が軽くなりました。実業高校などはその「訓育」の部分がかなり大きな位置を占めるようになりますが、教育はそれだけではないです。

そして、部活がなかなか成立しなくて悩んでいる本校では、私は学習活動の部分で「陶冶」と「訓育」両方をやらなければならなかった。寺島先生は、先ほども書きましたが、「見える学力」と「見えない学力」両方をつけてやらなければならないと繰り返し言われました。記号研方式ではそれを考えに入れないと授業が成立しないと考えています。

「見える学力」とは、考査の点数などで分かる生徒の学力ですが、記号研では「見えない学力」①集中力②継続力③計画力をあげるために、①歌の速写、②マラソン方式、③評価の可視化を指導の柱としています。

このやり方で、最も私が驚いたことは、英語を不得意としている生徒たちの方が、かなりこの３つの力を持っていることです。ただ、静かに授業を聞いている(と思われる)生徒たちの方がこの力を持っていないことに最初はただ驚きました。英語を不得意にしている生徒たちは先生に文句をつけながらも、しっかりこちらの評価の仕方は聞いていたり、「今日は１枚プリントを終わらせたから休める」と計算(計画)ができるのです。ただおとなしく座っている生徒の方が、こちらの話を意外に全く聞いていなくて、一々個人的に確認していかなければならないことが初めて分かりました。

生徒同士の間ではそういった生徒であることもとてもよく知っていて、そういう生徒をどう見るかで、教師の力量を測っているということもあると思います。

***大西忠治・・・著書に『核のいる学級』、『説明的文章「読み」の指導技術』『文学的文章「読み」の指導技術』などがある。**

３－１　①歌の速写

さて、①の歌の速写ですが、これは「リズム読み」というのが記号研であります。例えば、There is a hole や Big Turnip 、Cruel War、Yesterday などの典型教材があって、これをやると９０％くらいの確率で授業が成立するという、今で言う「鉄板」のものがあって、これをやった上で色んな歌に挑戦させたり、授業が横持ちで自由にならない時に、早めに授業内容を終わらせておいて、「投げ込み教材」として「リズム読み」をさせると、見事に生徒がのって来たりします。これは、まず、歌で英語のリズムに慣れさせておいて、後で授業の文そのものにリズム記号をつけて、生徒に読ませ、その定着をはかるのに使います。以下に、そのリズムの一番分かり易い例を載せておきます。

。　。　□　。　。　□　。　。　□　。　。　□　。　。　□

6. There's a flea on the fly　on the frog on the bump on the log

ゼアズ　ア　フリー オン　ザ　フライ　オン　ザ　フロッグ　オン　ザ　パンプ　オン　ザ　ログ

。　。　□　。　。　□　。　。　□

in the hole in the bottom of the sea.

イン　ザ　ホール　イン　ザ　ボトム　オブ　ザ　シー

。　。　□　。　。　□　。　。　□　。　。　□　。　。　□

There's a flea on the fly　on the frog on the bump on the log

ゼアズ　ア　フリー オン　ザ　フライ　オン　ザ　フロッグ　オン　ザ　パンプ　オン　ザ　ログ

。　。　□　。　。　□　。　。　□

in the hole in the bottom of the sea.

イン　ザ　ホール　イン　ザ　ボトム　オブ　ザ　シー

。　。　□　。　。　□

＊There's a hole － there's a hole

ゼアズ　ア　ホール　ゼアズ　ア　ホール

。　。　□　。　。　□　。　。　□

There's a hole　in the bottom of the sea.

ゼアズ　ア　ホール　イン　ザ　ボトム　オブ　ザ　シー

この歌は、「マザーグース」の中にある歌です。様々なバージョンがあるが、「幸せなら手を叩こう」のメロディーで歌って、１～６連まである。段々、「海に底に穴があって、木材があって、その上にこぶがあって・・・。」と、１つずつ物が増えてきます。最後に「のみ」が出てくる６連で終わるという言葉遊びなのだが、生徒は、リズム読みをする前に、３回速写して全部を書き写さなければなりません。最初は文句を言うが、これにかな

りの高得点をつけておくと、生徒は物も言わずにひたすら書き写すようになる。

また、先生がまずこれをリズム読みで暗唱できるようにしておき、生徒に「自分もやりたい」と思わせなければならない。それから、リズム読みを１人１人列順にやらせる。生徒は、内容語に□がついていて、それを強く読まなければいけないので、機能語である小さな。がついている語はすばやく読まないといけないことに気がついてくる。

また、これが典型教材であるゆえんは、□をリズムの等時性で、等間隔で読まなければならないために、音が「結合」(There's a をゼア　ズ　アではなく、ゼア　ザ)するということがはっきり見えるようになることにある。(『英語にとって「音声」とは何か』(2000、あすなろ社、p.30)

１人１人列で読ませるのにも、１つルールがあって、ペンを持ってしっかり□の位置で叩かなければなりません。そして、ペンはいつも字を書くように握るのではなく、太鼓を叩くように握る。これは、絶対生徒にやらせます。

記号研方式には**「A をやらせたければ B 指示せよ」**というルールがあって、生徒がやる気を持ってリズム読みをしようとするときに、発音がどうだとか、アクセントがこうなどと注意すると、生徒は途端にやる気をなくす。ところが、「君のペンの持ち方が駄目。」とか、「ペンを叩いている音が聞こえないからやり直し。」と言うと、きちんと居住まいを正してから、もう一度リズム読みに取り組む。とても不思議なことだ。

最後に、この練習が終わってから、気の合った生徒同士で先生の前で発表することとしておく。これができると、さらにポイントをあげる(例えばスタンプ方式なら、スタンプ３つ分など)ことにしておくと、俄然生徒はやる気になって、友達同士練習した後、先を争って発表に来る。ここでまたポイントなのは、先生が黒板の前に立っていて、その前で言えばいいこととしていることだ。これをクラス全体の前で、とか、廊下に出て先生と１対１で、などとすると雰囲気は暗くなってしまう。このやり方なら、うるさくしているようで、生徒は仲間の発表を耳をそばだてて聞いていて、一番集中力が増す。雰囲気も開かれていて、クラスが明るくなる。

３－２　②マラソン方式

マラソン方式とは、教科書をマラソンプリントに作り替え、それを１時間１枚生徒は完成させていくものです。本校のように生徒が荒れている場合、１人１人に対応しながら、授業ができるので、とても役立っている。教科書の英文にフリガナをつけ、さらに日本語訳も右側に与えておく。一語一語の単語の直下に日本語を書く欄を付け、１語ずつ全て埋めて行くと、例えば、「私　好む　野球」なら、日本人ならこれを文にすると、「私は野球を好む。(好きです)」という訳が必ず頭に浮かぶはずだ。これは、日本にある程度住んでいる外国人でもある程度はできるようになる。

これを教科書１レッスン毎やっていく。マラソンプリントを提出したものはチェックしておいて、次のプリントをどんどんやっていくことができる。ここで、生徒があまり早く走りすぎないように、1枚終わった者から次のプリントをもらえることとする。なぜなら、このプリントは皆が次をすぐ読みたがるので、どんどん進んでしまって、早い者はやることがなくなってしまうからだ。だから、マラソン方式をやるには、こちらの体力勝負のところがある。実際、今の自分の授業でやっていて、もう大分早く進んでいる者が出てきて

いるので、今度は、できたものは１人１枚ずつ、新たに文章の並べ替え小テストを課そうかと考えている。

しかし、一番大切なのは、生徒が量を読むということだ。私は早く走っている生徒には、他の読み物を読ませ、それをスタンプ点に換算して成績をつけると言って、渡している。量を読むことが生徒の力量を上げるには肝心なことだと考えている。つまり、量を読んで、「最初は記号ありで→他の英文を記号づけして→最終的に記号なしで」読めるようにする「学力の転移」を目標にしているからだ。

記号研方式では、「学力の転移」が重要視されている。以下に引用する。

> **すなわち「見えない学力」、つまり「自分の意志で自分の肉体をコントールできる力」が弱いと、毎日の寝る時間が一定せず、結果として毎朝の起きる時間も不定期になります。・・・（省略）**
>
> **こんな生活では「見える学力」はつくはずはありません。なぜなら学力をつけるためには、必要なときに自分の意志で自分の肉体を制御して机の前に座らせることができたら、今度は課題に「集中する力」が必要ですし、それを毎日「持続する力」も要求されます。いつまでに課題をやり遂げるかを決める「計画力」も問われます。（『教師とは何か』p.24）**

『教師とは何か』を読んで、私は、生徒が怠惰であったり、遅刻してきたりしたときに声を荒げることが少なくなりました。逆に、授業中寝ていたり、取り組みがいまいちの生徒にも、「次はきっちりやらないとまずいよ。」とか、次に繋がる言葉をかけるようになった。すると、そういう生徒が逆に考査前になって、「何をしなきゃいけないの。」などと聞いてくるようになった。これを声を荒げて怒っていたなら絶対にその生徒は私に声を掛けては来なかっただろう。

また、「分からなさの構造」を知るように寺島先生は常に声を掛けてくれた。例えば、マラソンプリントでもいまだに This is a pen. の is を日本語にすると、「は」だと答える生徒がかなりいる。実際は「～の状態である」という意味だが、いかに今の生徒が言葉を軽んじているかが分かると思う。全く友人の信頼関係が成り立たない状態で、言葉を信じられなくなっているのかもしれないと私は彼らの気持ちを想像するようになった。寺島先生には、とにかく「生徒と共に考えること」や、「生徒の中に入っていくこと」を重んじるように言われた。私は、生徒がそんなところが分からないのかと未だに新鮮な驚きの連続だ。

また、記号研方式は他の同僚に対してもすぐに理解されたわけではない。寺島先生は、そんな時には、「行動で示すしかないね。」と言われました。私は本校に来て、６年目ですが、ひたすら寺島先生のこの言葉を実行してきたつもりだ。

ですから、簡単に記号研方式がうまくいっているのではなくて、やはりそれなりに私にも「転移する学力」がついてきているのだと考えている。なぜなら、今まではこんなに授業のためにプリント作りに精を出さなかったし、自分の英語力にもあまり関心はなかった。ですが、ALT とリズム読みを使って授業をやりたいと伝えるためには英語が必要ですし、しっかり英語を勉強するようにもなった。

実際、自分の今のスタイルは、①単語小テスト(15 分)②マラソンプリント(25 分)③答え合わせ(10 分)となっているが、生徒がダレてきているので、もう少し工夫が必要だと考えている。リズム読みをさせてみてもいいし、色々考えようという意欲ができてきたことが、私にとって記号づけをしてきた意味であると考る。

マラソンプリントは、動詞に〇がついていて、日本語でも〇の位置には必ず動詞をいれなければならない。ですが、生徒は動詞と名詞の区別もまるっきりついていないので、最初は手取足取りだった。しかし、頭のいい生徒はすぐに理解して、分からない生徒を援助するようになった。これが、マラソンプリントのもう１つのいいところだ。

また、１日１枚というノルマは、生徒にも分かり安く、さらに、何日か休んだ生徒も取り戻せるのだということが示せるので、生徒は意欲をなくすことなく授業に取り組むことができる。

平和学習や、自分が日頃こういうものを読ませたいと思っている教材があるなどして、欲求不満になるときも、自分が今、１人１人が理解して進める授業をしていることに満足感が持てて、自分を納得させることができる。

考査で生徒が点数が取れないのではと思って見える方もいるかもしれないが、１人１人全員がこのプリントを出すので、少なくとも１回は、１通り内容を手書きしている、または、暗号解読的楽しさでこのプリントをやり終えているので、内容を問う問題を入れるとかなりの生徒が答えることができる。教科書の内容も必ずしも良いわけではないが、読みながら、自分が日頃感じていることだとか、を混ぜ込みながら授業ができるわけだ。だから、授業に余裕ができてくる。授業の余裕とは、つまり、教師の余裕だ。

前任校にいる時までは、授業のことをこれ程考えたことはなかったが、ここまで考えると、本当に、生徒の一言一言が重く感じられて、授業に関係した生徒の一言がとても充実感を与えてくれたり、時には、こちらが「ハッ」とする一言を生徒が言ったりしたときは、とても考えさせられたり、授業が面白く感じられたりする。

３－３　③評価の可視化

本校では、考査６割、授業態度等４割を目安に評価をつけている。寺島方式では、何が何点だから、評価はこうなるということをしっかり明示する。ただ、本校では、横並びで授業を持っているので、他の先生方と合わせる必要がある。ですので、事前に、とにかく考査は内容を問う問題を中心にするという約束をしておき、後は本校で決められた、スタンプや(授業開始時に着席しているか、服装、テキストを準備しているか)、学年全てで単語小テストをする、あるいは、考査は学年共通テストということに決めておけば、生徒は特に文句を言ってくることもない。さらに、態度はスタンプや、提出物などで決めるとしておくと、学年最後に１を取ってしまった生徒でも、そのデータを前にしては一言も申し開きができない。

このように、可視化は、生徒に分かり易く、さらに、先生方が連携して行うと非常に効果的であると分かった。

４　構造読み、主題読み

さて、私が記号研で学んで目標にしている実践は、『英語授業への挑戦』(寺島美紀子、

1990、三友社)だ。自分が大西忠治を修士論文に取り上げていることもあるが、私は授業での意見の集約や、生徒の人格形成に興味がある。自分も小学校時代に集団主義教育を受けてきたために、それがある意味自分の理想と言えるし、寺島先生のゼミでできたあの討論がどうやったら自分が作り上げられるのか、そうするために何が必要かまでを考えると、大西忠治の『続　核のいる学級』や、討論の二重方式まで行き着く。それを目標にしているため、当然構造読みに帰着してしまう。

構造読みとは、大西が考案した文章を読み取る上での方法論だ。まず、「文学作品」と「説明的文章」に分け、「文学作品」なら、ふくらまして読む、「説明的文章」なら、しぼって読むなど、読み取りのポイントを教える。特に、文学作品では、その作品の山場を探り、それからそのエピソードがどこから始まり、どこで終わるのか、また、プロローグやエピローグがどこであるのかを生徒と文章を読みながら討論していくやり方だ。討論を進めるうちに、生徒は、自分の読みが、他の人とは違うあるいは、同じだということとか、自分が正しいことを証明するために、理論武装したりする。

このように、寺島メソッドは奥が深いのだが、あるメソッドを知っているということとやってみてどうだったのかとは全く違うことなので、やったことしか私が今述べることができず、申し訳ないのですが、そういうものしか自分が本当に考える材料になっていかないのだ。

私は、同じメソッドの、寺島美紀子先生の『授業への挑戦』の CROW　BOY の構造読みがとてもすばらしいと思っている。本校の生徒にこれを直接ぶつけるとなかなか大変なことになる。(本校の中でも優秀な生徒には少しやってみたことがある。)けれども、自分自身の生活が大変な子たちにあらたにこの大変な生徒の気持ちを考えさせることはなかなかしんどいし、横並びの授業を持つ私にとって、自分だけこの教材を与えるわけにはいかなかったので、Vivit English Course Ⅰの中の、Lesson 8 Everybody Is Different を使って構造読みを仕掛けてみた。以下の内容は、自分が平成２２年度の教課研究集会で発表したものだ。(以下抜粋)

③　構造読み、その２

「読み」に関する実践というと、今年度任せてもらった２年生の英語Ⅱで、Vivid Ⅰ Lesson 8, 9 に取り組みました。Lesson8 は乙武さんの『五体不満足』からのエッセイで、Lesson9 は、臓器移植に関する文学的文章でした。

私は、先行実践があり、構造読みの答えがすでにある、『The Big Turnip』や『Crow　Boy』などに取り組ませたかったのですが(夏以降すでに準備してあった。寺島美紀子先生のをお手本にさらに書きやすいように大きな版に直してあった)、英語科主任から急に英語Ⅰの教科書を終わらせるように言われたので、急遽 L8, L9 に取り組まなければなりませんでした。

構造読みは、ある程度「このあたりではないかという予測を自分でたてることはできますが、やはり典型教材でまず追試をしてみるとか慣れている先生方に伺わないと、最初は難しいと思います(間違った答えを教えたりしたら、それこそ生徒の「読み」の力を損ないかねないし、私の授業そのものに疑問が生じ、親からのクレームだけでなく先生方からのクレームもあるでしょう)。

だから、仕方なく、記号「掲示板」に乙武さんの文章を載せ、皆さんだったらどう教えられるのかを聞いたのです。これに答えてくださったのが新見先生(定年退職して現在は朝日大学の非常勤講師)でした。

新見先生は、これを A=乙武さんの主張と B=彼の生い立ちに分け、B ①～⑤段落、A ⑥段落、B ⑦～⑧段落、A ⑨～⑫段落に分られる、「記録文」として読むべきとメールで言われています。(太字の部分がメールの内容です。)

むしろ説明的文章の中の「記録文」として読むべきです。(大西忠治著作集１３巻:52-5 参照)そこでは A まとめ記録と B 見たまま記録に分けられています。A のまとめ記録「説明」、B の見たまま記録は「描写」されている部分ということができます。(記号研「掲示板」2010, 1/2)

しかし、これに寺島先生から反論がありました。

1)乙武さんの文章は「文学作品」ではないけど、「記録文」か。「記録文」というのは純粋に火山の噴火を記録した文章のようなものを言うのだろう。『チャップリン自伝』が「記録文」か?
2)乙武さんの文が文学作品でないとするなら、「主題よみ」というのはおかしいでしょう。文学作品は「主題よみ」だけど、「説明的文章」は「要旨よみ」でしょう。
3)だから随筆はむずかしい。乙武さんの原文はどうなっているのだろう?それを調べてみる必要がある。(記号研「掲示板」2010, 1/31)

以下は寺島先生の指摘に対して新見先生が書かれたものです。

私はかなり自信を持って書いたのですが、厳しい指摘でした。やはり「記録文」と捉えるより「随筆」と考えた方がいいようです。(中略)

これは「5体不満足」の原文を検討する必要があります。おそらく英文は原文の抜粋であったり、修正があったりしますから。まして抜粋や修正が加えられている場合あてはめることはできません。ですから佐藤さんが授業をされる場合も「構造よみ」は略した方がいいのではないでしょうか。(中略)

これらを全てやるのは難しいです。大西忠治も中1では「構造読み」を中心にやり、あとは教師が説明する。中学2年では、「要約よみ」や「形象よみ」を中心にやり、後は教師の説明で済ます。中学3年生で「主題よみ」や「要旨よみ」を中心に行う、と書いています。ですから、この文章もどれにしぼるか生徒の実態に合わせて、しぼって行うのがいいのではないでしょうか。

もう一つは「疑問」からスタートする授業です。

・お母さんは、障害を持った子供が生まれてきても、どうして「喜んだ」のでしょう。

・山へどうやって一緒に登ることができたのだろう。
・お母さんは養護学校でなく、どうして近くの学校へ入学させようとしたのだろう。
・偏見をなくすことは難しい。でも本当にできるのだろうか。どうしたらいいのだう。

生徒に疑問を出させ、それを書いて考えたり、議論したりする授業の方法です。こは寺島先生や大西忠治が著作を読ませるとき、大学で行っている方法でもあります。

訂正かたがたいろいろ書きました。少しでも佐藤さんの参考になればと思って書きしたが、一番自分の勉強になっているようです。（記号研「掲示板」2010,1/31）

私は、構造読みを授業でやりかけていたのですが、これを読んで、慌てて中止して、生徒に一つだけ疑問を書かせるというスタイルで授業してみました。

生徒はなかなか疑問を作ることはできませんでしたが、私が近くまで行って書かせるようにして、クラスで１０個ほどの質問を出させることに成功しました。けれども、本当に慌ただしく、準備をその日にする位慌ただしい授業になってしまったので、生徒もなかなか落ち着きませんでした。

ちなみに L8, 9 を２ヶ月で終えなければなりませんでした。その前の Rapid Reading と L6 で８ヶ月かかっています。その位「生徒が全員分かって、授業についてこれる」というペースが遅かった。しかも、途中で授業を妨害されたり、つかみ合いになりかけの喧嘩はしょっちゅうありました。

とにかく、私はこの生徒の疑問に答えるために、『五体不満足』の原書を２日かけて読み、この随筆的文章がどうしてこんなに分かりづらくなっているのか、やっと理解しました。

『五体不満足』自体は、乙武さんの人生が最初から現在まで綴られている文学的文章の一つと思われるものでした。それを教科書に収録するために、「いいとこ取り」をして詳しい説明をとことん切り詰めた英文随筆に仕上げてあるのです。

例えば、クラスのみんなが弘法山に登るという場面があったのですが、生徒からの質問にも多く出ていましたが、「どうやって乙武さんが山に登ったのか。」が全く書かれないまま、「山頂で食べたおにぎりのおいしさを忘れられない。」とか、「どうやって乙武さんは食べたり、書いたりできたのか。」が書かれないまま、「乙武さんが小学校に通って、普通の生徒と変わらず生活した。」と書かれているので、生徒は、彼がどんな人で、どういう努力をして今に至ったか(ニュースキャスターとして見たという生徒はいた)が全然分からないまま、「人が異っているのは当然で自然なことなんだ。」と主張されているのです。これでは、生徒は文章が全く頭に入ってこないのではないでしょうか。

仕方がないので、私は原書から、生徒の質問に対する答えとなるものが入っている文を探し出してきて、切り貼りをして生徒に A3 の紙一枚で提示しました。すると、最初ざわついていましたが、それにも関わらずその紙を読み進めると、だんだんシーンとなってくるのが分かりました。読み始めると、「体の不自由な人」（生徒自身が、両親が離婚している、能力がない等の辛い状況にある子が多いので、辛い話というのは聞きたがらない。）についてあまり聞きたくないと言っていた生徒も、「不公平」というのは何について「不公平」と言ったのか、などと質問が出ました。

（乙武さんだけ体が不自由なので山に登れないと自身でも思っていたが、同級生がいつも乙武さんに口で言い負かされているので乙武さんが山を登らないことが「不公平だ。」と言ったこと。私のクラスで発言した生徒は、乙武さんが山に登るということを、みんなと一緒にできないから乙武さんだけ不公平になると勘違いした）。

また、この後、『魔法の英語』（あすなろ社／三友社出版）にも出てくる、シング『オオカミに育てられた子』の「アマラ」と「カマラ」の話は果たして本当なのか。またライマー『隔絶された少女の記録』の、生まれてから 13 才まで部屋の中で監禁され、言葉も話せなくなった少女の話を取り上げると、生徒は非常に興味を持ったようで色々と質問してきました。（不思議なことにそういうことを質問するのは「英語が不得意」といわれる子たちが多い）。

私は「アマラ」と「カマラ」について、Wikipedia では、事実かどうか疑問だという説が書かれているが、「シング牧師は孤児院の経営を成り立たせるためにこういった物語を書いたという説もあるけれど、彼女たちが（足で）立てなかった状態であったことや、それを立たせるためにどう訓練したかが詳細に書いてある。それが嘘だというのはちょっと考えられない。また、アヴェロンの野生児という同様の例もあるから、私は本当だと思う。」と言っておいた。

また、『隔絶された少女の記録』では、記号研「掲示板」でも書いたが、生徒は詳しく知りたかったようだ。

「いつの話?それ、最近やない?」。私が、はっきり思い出せずに、「うーん、二十年くらい前かなぁ」（記憶違い、実際は 1970 年代）と答えると、「ほんなら、まだ生きとるやん」とその矛盾をついてきます（その女性は亡くなっていると、先に言ってしまっていたため）。（記号研「掲示板」2010, 3/9）

このように、生徒は「いじわる読み」（物事の真偽を確かめながら文章を読むこと）を自身の経験から行っていることに注目していただきたい。

私は、ただ、「こういう人の人生そのものが本には出てくることがあるから、本を読もうね」と読書を勧めることができた。

私は、乙武さんの文章に取り組んでそれに関して少しでも新たな発見があ

ったのがこんなにうれしいとは思わなかった。先日の EH 研究会で、東京の戸山高校の先生も午前中にワークショップをされたらしい。私はその先生の話は聞かなかったが、懇親会に参加して、代わりに乙武さんについて質問した。戸山高校は乙武さんの母校であるが、乙武さんが生活できるようにバリアフリーに本当になっているのかや彼がどういう人物だったのか少しでも事実が確かめられて、その日は本当に自分だけウキウキしてしまった。東濃高校に帰って、生徒にもその話をすると、生徒はそういうところだけ良く聞いていて、「飲み会をしたんやろー。」などと何もないのに冷やかしてくる。乙武さんではないけれど、そういう何でもない一言によって動かされていると、この頃よく思うようになった。

それはともかく、私の構造読みのレベルはまだまだ未熟です。しかし、この中に書いてあることの裏には、膨大な私の努力がある。プリントを作り、添削し、土日も必死になって本を読む、というまさに肉体労働である。

しかし、そういった精神的にきつい状況でも何とかやってこれたのは、この間、初めて気づいたのだが、自分が授業を何とかやってこれたのは、単に、「記号づけ」や「構造読み」らしきものをやって授業が楽しい・うれしいからだということである。医者から「病気が大崩れしないで現在の状態が保たれているのはすごいことだ」とほめられるようになったのも、恐らくこのためではないかと思っている。

長い引用になり、申し訳ないのだが、私の気持ちがここに１番よく書かれている。何気なく、「アマラ」と「カマラ」の話は本当だと思う、と私は言っているが、最近はもっと、シング牧師の気持ちを考えるようになってきている。この話がでっちあげだったとしても、でっちあげようとした教育者としての気持ちはどのようなものであったのか。どういったそうせざるを得ない状況があったのかを考えると何ともせつない気持ちになり、それは現在の私の勤務校の状況を考えると私だったら嘘をついても彼らに対する援助を仰いだだろうなとか、考えてしまった。

また、ライマーの『隔絶された少女の記録』も、１３歳まで、父親からの虐待で自宅に軟禁されていた女の子をずっと研究してきた女性の目線で語られ、隔離されていた少女が老人ホームに入ってやっと自分の母親と打ち解けることができたなど、とてもせつない話だが、そういった問題に対する教育者の関わり方とか、その気持ちをとても考えるようになっている。

いずれの場合もどう教育を施せば良かったのか、正解はありませんし分からないが、大変な子どもたちを世話した人たちの気持ちはどうだったのか、事実は本当は何だったのか、がいまだに疑問として私の心に残っている。

5　ペンタブレットについて

さて、やっとこの視聴覚教材の使用についてという本論にたどり着いたのだが、これは昨年度外国籍の生徒に対して、実践してみたことだ。今年度は時間割の都合上、同じ授業を２人で持たなくてはならなくなったので、現在の所まだ実践してはいないが、今後機会

があればやらせてもらいたいと考えている。

本校で特徴的な外国籍生徒について、皆さんが疑問に思うところでもあると思う。私は昨年度外国人クラスの担任だったので、今年度また、外国人クラス担任ではないのだが、学校として外国籍生徒の担当という仕事を与えられている。

外国籍生徒は、皆さんがご想像のように、日本に対する理解が少ないという面でそのカルチャーショックに対応するのは大変だ。けれども、何分フィリピン人が多く、英語が英語教師の私よりもできる生徒も多くいる。ブラジル人も、日本に来ようという人たちなので、教育に対する意識も高く、発展的な考え方をする生徒が多くいる。

こういった利点を考えると、あまり前に出たがらない日本人と比べるとポジティブな面を見いだすことができる。こういった日本人にハッパをかける意味でも、お互い競争しながら自分の能力をあげていってくれることを期待している。

こういった外国籍生徒の利点をさらに伸ばすためにも、このペンタブレットの使用を考えていて、まず、英語が堪能なのだが、文法的にはあやしかったり、しっかりと記憶していない単語を定着させるためにも、量を読むことを念頭に置いて考えた。

「しかし2007年JAASET(記号研)夏の研究会(於・東京)で大手山茂氏(茨城・清真学園)の実践を見て気持ちが大きく変わった。大手山実践は、プロジェクターを直に黒板に投影し英文を写しだし、その英文にチョークで記号づけをしていくというものであった。これには衝撃を受けた。この大手山実践は、なんと中学三年生にStudent Times の論説記事を配って毎時間その場で記号づけさせ、その解答をプロジェクターから黒板へ投影された画像に直接チョークを入れていくというものである。かなり難しい題材であっても辞書は一切使わず、内容解説も和訳も一切行わないのだが、生徒たちがきわめて正確に記号づけしており、英文をかなり読めている様子が伝わってきた。

大手山実践とは異なり、私は、先述のとおり、予め配布したプリントの指定部分を翌週までの宿題とし、その解答を行いつつ解説を加えていくというかたちをとった。学生たちには「和訳も配布してあるから、参考にして記号づけをやって来なさい」と指示した。」(朝日大学情報学研究第１８巻、p.25.26)

上記引用部分の時点では、朝日大学の寺島美紀子教授は、黒板にチョークで記号を書き入れていく方法をとっていた。しかし、２００８年夏の研究会では茨城県の寺田義弘先生(竜ヶ崎第一高)が、今回紹介するペンタブレットを使って授業をして、成功したという報告があったので、それを利用しようと考えた。

英語は、基本的に動詞に○、従位接続詞に□をつけて読んでいけば、単文に分解できて簡単に読むことができるようになる。そのため、英語初級の生徒には、教員が○、□をつけてたくさん読ませ、読めるようになってきたら、自分で○と□をつけて読めるようにさせることが大切になってくる。ただし、外国籍の生徒といえど、長文を読む力量のある生徒は少ないので、たくさんの文を読ませるところまで導くには教師側に忍耐が必要である。

そこで、このペンタブレットで、生徒たちに自分の役割に責任を持たせ、生徒に自分のすべきことを果たさせること、また、他の生徒は生徒同士で間違いを指摘することができるように指導した。その結果、集中力を持って長文を読めるようになった。また、これは

保存できるので、後から確認することもでき、生徒にも緊張感が生まれる。

ipad でできるといいのだが、一太郎などのワープロソフトが ipad では使えない。また、肝心な記号をつけるという行為が生徒ができない。などの難点があったので、ペンタブレットの使用を考えた。

今回紹介するビデオは、最初にペンタブレットを使った際に撮ったもので、まだ生徒が○の付け方に慣れていない頃だが、授業としてはいいアクセントになっている。少なくとも、いつもは前に出てくることなど拒否する生徒や、真面目にやろうとする雰囲気を壊したがる生徒が、「やりたい、やりたい」と積極的になることには成功しています。少し初めてなので、間延びしていますが、ご覧ください。

外国籍生徒に対しての英語の授業だ。ちなみに、英語で授業はしていない。自分が自信を持って言える英語しか使っていません。なぜなら、外国籍生徒には、むしろ、日本語で授業した方が、たくさん日本語を覚えてくれるからだ。彼らは日本語をきちんと勉強したがらないが、基本的に日本語を覚えたいと心の奥底では思っている。だから、先生が話した日本語は、彼らはとてもよく覚えていて、分からないと積極的に聞いてくる。

また、本校では、よほど日本に合わなかった外国籍生徒を除いて、外国籍生徒の方が、考査に対して真面目で成績が良いです。

今回、岐阜県高英研主宰の英語スピーチコンテストで、フィリピン人の生徒の１人が、１８人中２人の難関を勝ち抜いて、県の決勝に残りました。これは、本人がフィリピンで学んできた英語力によるものでもあるが、日本に来てから、色々な問題を抱えながらも頑張ってきたその努力を素直に表現してくれたことによるものだ。

問題は多々あるが、日本人と変わらず、指導をすることには変わりはない。日本人の生徒も、変に差別をしないことで、学校がより穏やかになっていると感じている。

6　英語授業以外での使用

その他にも、English 部で何度かマルチメディア機器を使ってきた。Democracy Now! というインターネットメディアから、映像をダウンロードして、視聴覚室で「世界が今、どのような状況にあるのか」を実際に見せて、リズム・リーディングを行っている。この映像はその事件が起こっている現場での雰囲気を生徒たちに感じ取らせるために使った。

この時は Occupy Movement の時期でこの映像を使ったが、一部の生徒には効果的だったが、英語力の低い生徒には、レベルが高すぎてうまくいかなかった。

最近、寺島先生は、先日亡くなった、Howard Zin の『Voices of People's History』を朗読していく、「ドラマティック・リーディング」を実践されておられる。Occupy Movement ではうまくいかなかったが、寺島先生がそれを訳し『肉声で綴る民衆のアメリカ史』(2012、明石書店)、これを生かして、実践につなげられないか模索している。

こうした教材をリアルタイムで無線 LAN で見られる環境を作れば、もっと授業にインターネットを取り入れられると感じた。茨城県では、各教室にプロジェクターが 1 台ずつ整備され、こうした授業が容易に行われている。

ペンタブレットの授業では、ipod や ipad ではなく、大きな画面が必要であるため、コンピュータとプロジェクターを授業のたびに自分で持って行かなくてはならない。したがっ

て、このような授業を今後積極的に行うためには、教室の IT 環境の整備に取り組んでいく必要がある。

7　授業をやってみて

今回のメディア部会の報告をきっかけに、自分が目指している英語の授業のため、実践したかったペンタブレットを使った授業をしてみた。実践してみると、コンピュータを複数使用する際に、インストールされているソフトのバージョンの違いなどでペンタブレットのインク機能を使えないなどの困難があったが、マルチメディア機器の使用は、何度も失敗を繰り返して操作に慣れることが一番必要なのだということが実感できた。まずは物怖じせずに、触れてみて、そして、一度操作に慣れてしまえば、クラス全体に「わかりやすい授業」を提供できることがわかった。

生徒たちもスマートフォンなどで情報機器に親しんでいるので、こういった操作で私が失敗している際にも、「一度スキャナーで写してから書いてみれば」などと、彼らなりに操作方法を一緒に考えてくれた。こうした発言からも、彼らが情報機器の操作に大変関心を持っていることがわかり、授業でこういった機器に触れさせてあげることや、操作に慣れさせていくことが、近年は本当に必要になってきたのだなと感じた。今後も、特に日進月歩で進化する情報機器については、どんどん新しい領域を開拓していきたい。

参考文献

大西忠治(1991)『教育技術著作集第１巻　教育的集団の発見・定本「核のいる学級」』明治図書

大西忠治(1991)『教育技術著作集第１３巻　説明的文章「読み」の指導技術』明治図書

大西忠治(1991)『教育技術著作集第１４巻　文学的文章「読み」の指導技術』明治図書

大西忠治(1972)『続・核のいる学級』明治図書

乙武洋匡(1998)『五体不満足』講談社

チャールズ・チャップリン(1986)『チャップリン自伝』(上・下)新潮文庫

寺島隆吉(2002)『英語にとって「教師」とは何か』あすなろ社

寺島隆吉(2002)『英語にとって「音声」とは何か』あすなろ社/三友社

寺島隆吉(2012)『肉声で綴る民衆のアメリカ史』(上・下)明石書店

寺島隆吉 ed.（1985） The Big Turnip. 三友社

寺島隆吉・寺島美紀子(編)、記号研(著)『魔法の英語』あすなろ社

寺島美紀子(1990)『英語授業への挑戦』三友社出版

ラス　ライマー(1995)片山陽子訳『隔絶された少女の記録』晶文社

Howard, Zin / Anthony Arnove（2009） Voices of People's History of the United States: Steven Stories Press

Yashima, Taro（1955）Crow Boy. NewYork: The Viking Press